

菩薩としてのゴータマ・ブツダと大乘の菩薩

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-12-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 審也 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1644

菩薩としてのゴータマ・ブツダと大乘の菩薩

武蔵野大学 仏教文化研究所 研究員

武蔵野大学 看護学部 准教授

高橋 審也

1 大乘仏教の起源についての論争

大乘仏教が菩薩の仏教であることはいうまでもない。大乘仏教を担った人々は自らを菩薩であると自覚した人々であった。彼らは部派仏教の比丘である声聞に選んで自らを菩薩であると名乗って、自分達の立場を声聞乗に対して菩薩乗であると宣言した。

「菩薩」とは元々、原始仏教・部派仏教では正覚以前のブツダを意味する語であった。正覚以前というのは、ガヤーの菩提樹の下で覺りを得る以前のブツダである。釈迦族の王子としてカピラ城に誕生して、王子として王位を継ぐべきであったが、三五歳にして妻子を捨てて王宮を出でて、一介の沙門となった。六年間の

修行を経てガヤーの菩提樹の下で覺りを得てブッダとなった。このブッダとなる以前のゴータマを菩薩 (bodhisattva, Pali bodhisatta) と称したが、そのみならず、王子としてカピラ城に生まれる以前の前生のブッダをも菩薩と称した。無限の過去以来多数の生存において生死輪廻を繰り返しながら、多くの衆生の困窮を援けて、利他行を積み重ねて来た。その福德の結果として今生において正覺を得るべき身としてカピラ城に生まれた、この前生のブッダをも菩薩と称したのである。

このように菩薩とは、原始仏教・部派仏教においては基本的には正覺以前の前生を含めたブッダを意味する語であったが、大乘仏教は、自分達こそ菩薩であつてゴータマと同様に仏果を目指す存在であると自覺する人々によって担われたのである。

それではこれら菩薩であることを自覺したのはいかなる人々であつたのか。あるいは大乘仏教がいかなる基盤から成立したのか、ということについては、未だに確定的な答えは出ていないと思われる。

我が国の江戸時代以前では大乘仏教はブッダ（釈尊）の金口直説であるということは自明の理として信じられていた。もちろん、大坂の町人学者富永仲基の『出定後語』のような例外（註1）もあつたけれども、仏教界に於て大勢を動かす程の力はなかった。しかし、明治以降近代仏教学の成立によつて、ようやく大乘仏教は釈尊の金口直説ではないということが、仏教学界において認められるようになったのである。いちはやく村上專精は『大乘仏説論批判』（一九三六年 光融館）において大乘非仏説論を展開し、宗門（東本願寺）からの離脱を余儀なくされた。これに對して前田慧雲は『大乘仏教史論』（一九三六年 文明堂）において一切經を博搜して大乘仏説論を証明しようとしたが、自ら最終的にはそれに失敗したことを告白している。しかし、

前田は大乗仏教の思想的源流が部派仏教の大衆部にあることを明らかにした。

前田以降、大乗仏教は大衆部から興ったということが定説として認められて来た。欧米の学界においても、前田の説を紹介する啓蒙的な英語の書物(註2)によつて、大乗仏教の大衆部起源説が一般的に認められて来た。

しかし、第二次大戦以後、主として日本の学者によつて、大乗仏教の起源について画期的な学説が提唱された。それは大乗仏教の成立を思想の面のみならず、教団の歴史として見て行こうとするものである。平川彰『初期大乗仏教の研究』一九六八年春秋社、後に改定増補されて『初期大乗仏教の研究』Ⅱ 一九八九年、一九九〇年)によれば大乗仏教は大衆部のみならず、説一切有部など上座部系の思想からも影響を受けており、大衆部からのみの影響とはいえない。むしろ、教団の在り様から、大乗仏教の成立を眺めて行くべきである。大乗仏教は部派仏教のサンガ(僧伽)の中から生じたものではなく、仏塔に止住する在家集団によつて興されたものであるとする。

平川は戒律の研究では世界的な大家であり、その学識の蘊蓄を傾けての主張であるため、平川の説は「大乗仏教在家起源説」あるいは「大乗仏教仏塔起源説」と呼ばれて、我が国の学界では、ほぼ不動の定説として受け入れられることとなった。

しかし、我が国で一九九〇年代頃から、平川より大分若い世代の学者から平川説に対する批判(註3)が種々提起されることとなった。それらは概ね大乗仏教は仏塔など部派教団の外部の在家者から興ったものではなく、教団の内部即ちサンガに所属する出家者によつて興されたものであったとするものである。欧米の学者は元々平川の説に対して否定的な意見が多く(註4)、これらの結果、我が国において、ほぼ、確実な定説と考え

られた「大乘仏教在家起源説」にもゆらぎが生じることとなった。大乘仏教の起源については現在では混沌としているといっても過言ではない。

2 大乘仏教論議についての違和感

発表者は大乘仏教の起源については長い間、殆ど無関心であった。平川は恩師であるので、『初期大乘仏教の研究』が発刊されたことも、「大乘仏教在家起源説」についても知ってはいたが、その当時はそれについて強い関心を有することもなかった。むしろ大乘仏教教団が在家から興ったということにはいささかの違和感を覚えたことを記憶している。また、大学院の授業においては平川からは『プラサンパダー』や『俱舍論』の講読の授業を受けたが、「大乘仏教在家起源説」についてレクチャーを受けたことはない。そのことも、この問題について、余り関心を持たなかった一因かも知れない。

しかし、ある時期から大乘仏典に関心を持つて読むようになると、原始經典に比較してその表現や内容がより雑駁であるような印象を受けた。例えば『無量寿經』における極樂浄土の莊嚴や如来の威神力や神變の描写は、原始仏典の簡素な描写に比べてみると明らかに異なる要素を含んでいるように思われた。原始仏典が部派仏教のサンガの出家者によつて伝授されてきたものであるとすると、大乘仏典は明らかにそれと異なつた基盤から生じたもののように思われた。そのような観点から『初期大乘仏教の研究』を読むと、大乘仏教が部派仏教のサンガの外にある在家者、仏塔に止住する在家者から起きたという意味がよく理解できるように思えたの

である。但し、平川や平川説を支持し、それを補った静谷正雄（『初期大乘仏教の成立過程』一九七四年 百華苑）も「在家者」とは正式な具足戒受けていない出家者、サンガの埒外にいる出家者（註5）であると主張しているのであつて、このことは論議において誤解されている部分が多いと思われる。

しかし、その頃には平川説に対する批判も始めていた。しかし、平川自身は最晩年ということもあつて、出始めた批判には本格的には答えることもなく逝去したのである。

平川説やそれに対する批判について考慮する場合、それぞれの説に何がしかの違和感を覚えるのは部派教団と大乘教団との間の関係をどのように位置づけるかという問題に關してである。

平川説によれば、大乘教団に部派教団の外部に興り、外部に存在することになり、両者は交わることはない。平川は具足戒を受持しない比丘という広い意味で「在家者」として定義するのであるが、そのような「在家者」が当時のインド仏教に現実に存在しえたのかという疑問は強く残る。

平川批判派によれば、大乘教団は部派教団の内部の出家者から生じたものであり、始めは部派教団の内部に埋もれた存在（註6）であるということになる。

しかし、大乘仏教が部派仏教の出家者が起こしたものであり、部派仏教の内部から生じ、部派仏教の内部に存在するものであるとするならば、大乘仏教は例えば菩薩部とか大乘部として、部派仏教の一翼を担うもので良かったのかも知れない。しかし、大乘仏教は自らを菩薩乗と称して、声聞乗・縁覚乗と区別しているのは單に思想の違いのみに帰してよいであろうか。菩薩乗は仏果を目指し、利他を行ずる、それに対して声聞乗は阿羅漢になることのみを目指し、自利のみを求める、というのが、菩薩乗・声聞乗についての伝統的・一般的

解釈である。一方の縁覚乗はただ一人孤独に行じて十二因縁等を覚り他の人々に説法教化をしない。大乘の立場からすれば、自利のみあって利他の大悲心がないから仏になることが出来ない。これを見れば声聞乗と縁覚乗の違いは二乗間の思想の違いのみにあるのではなく、声聞と縁覚の存在様式の違いにあると見ることが出来る。

そうであるとするならば、菩薩乗と声聞乗の違いは仏果を求めるのか、阿羅漢果を求めるのか、自利利他円満か、自利のみかというところのみにあるのではなく、菩薩と声聞の存在様式の違いにあるとも見ることが出来るであろう。

3 菩薩乗の存在様式

以上の点を考慮しつつ、ここでは菩薩乗の菩薩とはどのような存在様式を有するものであるかを考察して見たい。その場合、原始・部派仏教のゴータマ・ブッダの菩薩像がいかにして大乘仏教の菩薩像に受け継がれて行ったか。大乘仏教を担った現実の菩薩教団の実体という二つの側から菩薩について考察を進めたい。

(1) 大乘菩薩の源流

大乘菩薩のモデルは成道以前のゴータマ・ブッダ

①阿含経 成道以前のゴータマを菩薩と称する。前生を含まない。(註7)

② アビダルマの菩薩　ゴータマの前生に及ぶ。『阿毘達磨發智論』『カタールヴットウ』（論事など）

③ 仏伝（讃仏乗）（註8）

マハーヴァーストウ（Mahāvastu 大事）、ラリタヴィスタラ（Lalitavistara 『普曜經』『方廣大莊嚴經』）、仏本行集經

ブッダの超人的な偉大性を讃嘆する。前生を含めて兜率天より摩耶夫人の体内に受胎するところから成道までのゴータマを菩薩と称する。ジャータカが間に差し挟まれて前生をも含む。ブッダがいかにして正覺を得ることが出来たかということをブッダの超人的な努力・能力・威力を讃嘆しながら物語る。菩薩の善行、利他行の実践が究極の高みにまで描写される。また、ブッダが前生において錠光如来（デーヴァンカラ Dipankara）の面前で未来に釈迦牟尼仏となるであろうという予言（受記）を得るという物語も菩薩という概念を考える場合に重要である。

ブッダの超人的能力、威神力・神変を過剰にまで讃美する点において大乘經典は讃仏乗から多くのものを受け継いでおり、両者の類縁性をうかがうことが出来る。

④ ジャータカ（Jataka 本生話）（註9）

ブッダの前生の物語。ブッダは前生において、菩薩としてウサギであったり、鹿であったり、猿であったり、外道の修行者、国王、帝釈天、樹の精であったりしながら無限の生死を繰り返しながら、その間に自らを犠牲にしてまで利他行を実践し、功徳を積み重ねたため、現生において正覺を得るべき身として、兜率天より、摩耶夫人の体内に受胎することが出来たということを物語る。

(2) 菩薩の理念

以上のように菩薩の理念は誕生以後成道までのゴータマ・ブッダ並びにその前生の境涯を含む。菩薩(bodhisattva)の意義が一般的に「覚り(bodhi)」を求める衆生(sattva)「覚りを求め同時に覚りが確定している衆生」(註10)と解釈されるのも以上の諸点から自然に理解されるものであろう。

また、衆生とは輪廻的生存を生きるものであるから、菩薩とは「覚りを求めつつ輪廻的生存を生きるもの」とも解釈される。ここから、菩薩は「無限の生死輪廻を生きつつ未来の正覚に向って歩み続けるもの」と解釈することが出来る。

このように菩薩の存在様式は輪廻的生存を抜きにしては語れない。前生においてはありとあらゆる境涯を経験して、その境涯においてそれぞれ善行を實踐した。その結果として現生において正覚を得べき身となったというものである。ジャータカによれば、ブッダ前生における菩薩の境涯は多岐に渡り、あらゆる職業の人間・動物・諸神・龍にまで及ぶ。人間では国王・比丘・バラモン・長者は言うに及ばず、仙人・苦行者・外道・貧乏人・博徒・盗賊にまで範囲が及ぶ。

また、ありとあらゆる動物も前生の菩薩であり、こうもり・鼠・魚にまで及ぶ。

諸神では帝釈天・梵天・樹神・海神さらには阿修羅も含まれる(註11)。

要するにいかなる境涯の衆生であつたとしても、皆菩薩で有り得る。ジャータカにおいては意識的に仏果を求める存在というよりも、善行利他行を實踐する存在ということであるが、菩薩であるという条件は一切限定されていない。

特に注目されるのは、比丘もまた菩薩たり得るということである。この比丘もサンガの成員としての存在か、成道以前のブツダのごとき出家修行者としての存在かは不明であるが、仮にサンガの成員で具足戒を受持する比丘であつたとしても、それは菩薩たり得ることの障害にはならない。

(3) 菩薩の定義

以上をまとめると菩薩の定義は次のようになるであろう。

菩薩は原始仏教・部派仏教では釈尊や過去七仏の前身・前生をいう。

菩薩は無限の生死を繰り返し数々の境涯を経て、善行利他行を实践した結果、現生において正覚を得るべき身となった。

菩薩の利他行は衆生を教化して苦悩から救うという側面と、ジャータカのように自己を犠牲にしてまでの直接的苦悩の救済という側面の二つがあるが、原始・部派仏教では前者の面は比較的稀薄である。むしろ衆生に対する大悲による伝道教化はブツダとしての仕事である。大乘の菩薩はこの両方の面を受け継いでいる。

大乘菩薩の行は六波羅蜜であるが、これは主として仏伝から受け継いだものである。

4 大乘菩薩の出現

紀元前後頃、自らを菩薩であると自覚する人々が現れた。彼等は（多分）仏塔において三昧に入中でブツ

ダの説法の会座に集う（註12）という体験を得て、それを大乘經典として説示したと思われる。

この自らを菩薩であると自覚したのはいかなる人々であったのか？

大乘仏教には出家菩薩と在家菩薩が存在したことは明らかであるから、出家在家両者を含むものであったことは間違いない。そもそも菩薩は輪廻的生存においてあらゆる境涯を経験しているから、菩薩という概念には出家者も在家者も当然含まれる。

出家者と在家者とのグループが集団を形成していた。これが菩薩教団（菩薩ガナ）であったと思われる。この集団グループの紐帯となったのは、『法華経』『無量寿経』『般若経』などの大乘經典であったと思われる。あるいは釈迦仏・阿弥陀仏・阿閼仏などを信仰するグループであったかも知れない。彼等は經典の読誦・書写などを特に勤めてグループを拡大して行った。しかし、その初期においては仏教全体の中ではマイナーな存在であり部派のサンガなどとは比較にならないほどの弱小勢力であったと思われる。

大乘菩薩としての修行は六波羅蜜で、それは特に出家者には限定されない行であることから菩薩教団の性格が理解できる。六波羅蜜の戒波羅蜜は十善業道であり、本来原始仏典では在家者の戒であるから六波羅蜜も出家在家共通の戒であり、出家サンガの法律条項である波羅提木叉とは根本的性格が異なる。

大乘經典には大乘仏教を奉ずべきものを釈尊が善男子・善女人と呼びかけている。原語 *kulaputta* は原始仏典では在家の信者を意味する語であり、このことは大乘の菩薩が出家比丘に限定されていないということを前提にしているということを理解できよう。

出家の菩薩のモデルとなったのは修行者時代のゴータマであるからサンガの成員ではなかった。ウルヴェー

ラーの森林の中で苦行を実践したゴータマである。それ故、出家の菩薩は理念的には具足戒を受持したサンガの成員であるということを保ずしも必要としない。ここに平川説の根拠も存在する。

大乘經典では特にアラニヤ（森林 *aranya*）における修行が強調される。これはブツダがウルヴエーラーにおける修行をモデルとしたものであろう。

しかし、現実の菩薩教団の出家者の多くは部派仏教で具足戒を受持した比丘であつたものと思われる。彼等はサンガの比丘であると同時に菩薩であつた。というより、菩薩にとつてサンガの比丘であることは無限の境界における生存の一つに過ぎないのであつて、その根本的アイデンティティはあくまでも菩薩であることにあつた。

大乘仏教は出家と在家とを理念的に菩薩という同一平面において見るものであるから、その初期においてはサンガの仏教ではなかつた。また、サンガの仏教としては機能していなかつた。このことは大乘教団を考える上で非常に重要な点であると思う。大乘仏教に大乘独自の律藏が存在していない理由はそこにある。

大乘仏教が部派仏教のサンガの内から生まれたか、外から生まれたかという議論はその点を考慮に入れなないと不毛の論争となるであらう。

部派仏教はサンガの仏教であり、例えると海に浮かぶ島のようなものである。島の外と内は厳格に区別されそれを互いに侵食することは許されない。それに対して大乘仏教は海に浮かぶ船のようなものであり、海という民衆世界を存在根拠にして成立している。それ故、大乘仏教にはインドの民衆の世界、フオークロアの世界が浸入して来ている。大乘經典の内容にはインド民衆世界が反映されている。

5 まとめ

大乘仏教は西暦紀元前後、自らを菩薩であると自覚した人々によって始められた。彼らは原始仏典・アピタルマ・仏伝・ジャータカなどのゴータマ・ブッダ前身前生の菩薩像を範として、大乘菩薩像を創り上げていった。ブッダの前身前生がモデルであるから、出家在家の区別なく、あらゆる境涯の衆生が菩薩で有り得る。

彼ら大乘の菩薩は出家者・在家者の両者から構成される集団グループを形成していたから、自らの教団をサンガではなく菩薩ガナと名乗った。教団の指導者の立場にいたのは、出家者であった可能性が高いが、在家者もまた菩薩としての地位を与えられているということは、大乘經典の内容に反映されている。

大乘經典は仏塔において三昧に入ってブッダの説法を聞いたという体験から成立したものだと思われる。仏塔はそこに生けるブッダがおわすところと考えられ、出家・在家すべてのものに開かれた空間であるから、大乘經典の成立した場所としては最もふさわしい。

一たび經典が成立すれば、經典の書写・読誦が勧められ、經典崇拜が確立する。しかし、それは仏塔の重要性を否定するものではなく両者は二者択一ではない（註13）。

註

- 1 富永仲基 『出定後語』 については、中村元 『近世日本の批判的精神』 中村元選集別巻7 春秋社

2 例えば増田慈良の著作 J.Masuda: Origin and Doctrines of Early Indian Buddhist Schools (Asian Major II) pp. 18ff.

3 下田正弘 『涅槃經の研究―大乘經典研究方法試論』一九九七年 春秋社

佐々木閑 『インド仏教変移論―なぜインド仏教は多様化したのか。』二〇〇〇年 大蔵出版

袴谷憲昭 『仏教教団史論』二〇〇二年 大蔵出版

4 G.Schopen, P.Harrison, P.Williams, J.Silk, J.Natier, R.A.Rays, D.Boucher など

5 平川は「このように初期の大乗の菩薩が「在家」であったという意味は、出家菩薩は、「具足戒」を受けた「比丘」ではないという意味である」平川著「大乘仏教の特質」『講座 大乘仏教1―大乘仏教とは何か』所収 一九八一年 春秋社

静谷も「初期大乘教団が在家者を多く抱えていたとしても、その中心となって活動したのは、やはり出家者であったと考えられるが、それゆえに、この出家者が、部派の正規の比丘とは異質の宗教者であったという事実は、第二の注意すべき点である」といつている。静谷著 前掲書 一〇ページ

6 下田、佐々木、袴谷 前掲書その他 グレゴリ・シヨペン著 小谷信千代訳『大乘仏教興起時代の僧院生活』二〇〇一年 春秋社

7 M.N 4 etc. 'pubbe me sanbodhā anabhisambuddhassa bodhisattvass, eva sato etad aho si]

8 仏伝については外園幸一『ラリタヴィスタラの研究』一九九四年 大東出版社第一篇に詳しい。

9 ジャータカについては干潟龍祥著『改訂増補本生経類の思想的研究』一九七三年 山喜房仏書林、山田

菩薩としてのゴータマ・ブッダと大乘の菩薩

龍城著『大乘仏教成立論序説』一九五五年 平楽寺書店

10 干潟著前掲書五七ページ

11 干潟同著 附編「本生経類総合全表」を参照

12 大乘経典が仏塔より生まれたということはあくまでも仮説であるが、仏塔ほど大乘経典が発生する場所としてふさわしいものはないと思われる。但し、仏塔止住の在家教団が存在したと考えているわけではない。

13 本論は大乘仏教の成立に関して菩薩教団の実態について概略を述べたものである。詳しくは『大乘仏教教団と戒律』日本仏教学会年報平成二十一年度を参照。以後各論を順次発表して行きたい。